

## Eneit における押韻の方言的特徴について

須 沢 通

### I

Heinrich von Veldeke の Eneit (1184年から1186年の間に完成) における言語使用に関して、ここに方言を越えた超地域的な共通語の傾向をみる説と、これを真っ向から否定する説の長年の論争は、今日まで明確な結論を得ていない。Veldeke によって書かれたものとしては、ミンネの叙情詩および格言詩、聖人伝 Servatius, 叙事詩 Eneit の全く異なる三種類の作品が伝えられている。このうち叙情詩および格言詩は、Veldeke の若い頃、故郷の読者を対象に詩作したものであり、ここには彼の低地ライン・リンブルク方言が色濃く見られる。Servatius に関しては、いくつかの古リンブルク方言による断篇の写本の他に、15世紀後半にリンブルク方言で書かれた完本が一つあるだけで、言語的特徴は当然のことながら、押韻も含め、リンブルク方言の色彩を帯びたものとなっている。これに対して Eneit の写本は、12世紀の作品としては非常に豊富で、12世紀から15世紀に書かれた7種類の完本 (B, H, M, E, h, G, w) と、5種類の断篇を有している。これらの写本はすべて高地ドイツ語 (Hochdeutsch) で書かれ、さらにその圧倒的に多くのものが上部ドイツ語 (Oberdeutsch) で書かれている。従って、Eneit 研究の初期の段階では、Veldeke が Eneit を高地ドイツ語地域の読者を対象にしたこと、とりわけ、彼がテューリングゲンの Hermann (1190年にテューリングゲン方伯) のもとで作品を完成させたことから、彼がこれをテューリングゲンの方言、すなわち東中部ドイツ語 (Ostmitteldeutsch) で書いた点が指摘された<sup>1)</sup>。

Ludwig Ettmüller は1852年に Veldeke の Eneit の最初の校訂本を手がけるが、その際手本としたのは完本としては最古の B 写本であり、さらに M 写本も参考にしている。この B 写本は押韻で中部ドイツ語 (Mitteldeutsch) の特徴が見られる以外は上部ドイツ語で書かれたものであり、M 写本には全体として南バイエルンの言語的特徴が見られる<sup>2)</sup>。Ettmüller の校訂本は Veldeke の言語の再現を目指したのではなく、テューリングゲンの言語を念頭に置いた校訂にとどまっている<sup>3)</sup>。これに対して1882年に Otto Behaghel は、Eneit が Veldeke の出身地マーストレヒト・リンブルク方言で書かれたものとしてその復元を試みたり。その際 Behaghel が手がかりとした G 写本と h 写本は、15世紀に書かれた最も新しい写本であり、G 写本は基本的には中部ドイツ語、特にテューリングゲン方言の特徴を有している<sup>4)</sup>。この G 写本を参考に、さらに聖人伝 Servatius の古リンブルク方言による断篇の写本に基づいて、Theodor Frings と Gabriele Schieb は1964年に古リンブルク方言による Eneit を編集した<sup>5)</sup>。しかし、彼らの労作も多くの賛同者を得ることができなかった。その理由は、一つには、写本のすべてが高地ドイツ語によるものであり、従って、古リンブルク方言で書かれた Eneit の稿本の存在が非常に疑わしいことであり、さらには従来の慣習とは大きく異な

る校訂方法に、研究者たちが大きな戸惑いを覚えたことによる<sup>7)</sup>。従って、最近の Eneit 研究は再び、最も古い Ettmüller の校訂本を拠り所にせざるをえない状態にある。

Veldeke の Eneit における言語的特徴に関して、今日の研究では、Veldeke が、最初リンブルク方言で書きはじめた未完の Eneit を、その後テューリンゲンで自ら、もしくは他人の手を借りて加筆し、修正を施し、残りの部分をテューリンゲン方言に馴染んできていた詩人自らが書き上げたか、あるいは、やはり他の者に依頼して、それを書き上げさせた可能性が指摘され、従って、テューリンゲンの Hermann の宮廷で完成した Eneit は、低地ドイツ語 (Niederdeutsch) と高地ドイツ語の中間的位置にあった中部ドイツ語圏の詩人語 (Dichtersprache) に依拠しながらも、当時すでに成立の過程にあった、超地域的な文学的共通語を目指した上部ドイツ語の宮廷詩人語 (höfische Dichtersprache) を考慮したにちがいないと考えられている<sup>8)</sup>。Eneit のエピローグによると、Veldeke は Eneit 全篇の 4 分の 3 ほどを仕上げた段階で、これをクレヴェの伯爵令嬢 Margarete の閲読に供したが、1174年に彼女がテューリンゲン方伯 Ludwig 3 世と結婚した際、この原稿を預かった待女の過失によりこれを失ってしまう。これは Ludwig の弟 Heinrich 伯が原稿を侍女から密かに奪い取って、テューリンゲンに送ってしまったことによる。その後 9 年たって Veldeke がテューリンゲンに赴いた時、Ludwig 3 世の弟で、後 1190 年 Ludwig の死後、その跡を継いでテューリンゲン方伯となった Hermann 伯によって再び原稿を渡され、これを完成させるよう依頼される。かくして 9 年の長い中断の後、未完の Eneit は再び詩人の手許で残りの 4 分の 1 にも筆が入られ、ようやく完成にこぎつけることができたのである<sup>9)</sup>。このエピローグの内容と、Eneit のすべての写本が高地ドイツ語で書かれている事実が、Eneit を高地ドイツ語、特にテューリンゲンの東中部ドイツ語で書かれたものとする根強い学説の根拠となっているが、さらにこの学説を一步推し進めて、Eneit に超地域的な文学的共通語への傾向を認める今日の一般的学説の根拠となっているのは、Eneit における押韻使用の特徴である。Veldeke が Eneit で方言的押韻語を避け、リンブルクの低地ドイツ語の音で読んでも、高地ドイツ語の音で読んでも韻が不純にならないよう努力したことは今日多くの研究者によって指摘されている。例えば Polenz によると、Veldeke は Eneit で *tīt* (nhd. Zeit) と *wīt* (nhd. weit) を押韻に使用したが、*tīt* と *wīt* (nhd. weiß) を韻として用いることはなかった。これはリンブルク方言の *tīt* : *wīt* (nhd. weit) を中高ドイツ語になおしても *zīt* : *wīt* となり韻を乱すことはないが、リンブルク方言の *tīt* : *wīt* (nhd. weiß) だと中高ドイツ語では *zīt* : *wīt* となって不純な韻を生むこととなるからである。また *līden* (nhd. leiden) と *snīden* (nhd. schneiden), *rīden* (nhd. reiten) と *tīden* (nhd. Zeiten) を韻として用いることはあっても、*līden* と *rīden* を結ぶことはしなかった。リンブルク方言 *līden* : *rīden* は中高ドイツ語になおすと *līden* : *rīten* となって韻が不純になるからである<sup>10)</sup>。C. J. Wells も、Eneit の押韻は低地ドイツ語よりもむしろ高地ドイツ語的特徴を有しており、例えば低地ドイツ語では同一の押韻語を形成する高地ドイツの *t* 音と *z* 音は押韻語としては厳格に区別されていると指摘し、Eneit に、高地ドイツ語では不純な韻を生む低地ドイツ語的押韻 (例えば *don* : *son* <mhd. *tuon* ≠ *sun*>, *vas* : *was* <mhd. *vahs* ≠ *was*>, *gelochte* : *verkochte* <mhd. *geloubte* ≠ *verkoufte*>) がいくつか見られる事実を認めながら、それが Eneit の高地ドイツ語的押韻の用例をいささかなりとも軽視できる要因とはなりえないとしている<sup>11)</sup>。

本稿では従来の Eneit 研究に基づいて、Eneit における押韻使用の方言的特徴についての調査を試みた。以下に Etmüller 校訂本に基づく Dieter Kartschoke の「Eneasroman」<sup>12)</sup> をテキストに、ここから収集した、高地ドイツ語では韻を乱すことになる方言的特徴をもつ押韻の用例を、G 写本<sup>13)</sup>及び O. Behaghel の「Eneide」を参考に、G. Schieb・T. Frings 編集の「Eneide」と比較、検討することで、Eneit の押韻の特徴を考察してみたい<sup>14)</sup>。なお以下の用例の比較において用いた「中高ドイツ語」(mhd.) の用語は、広義には第二次子音推移に関与した上部、中部ドイツ語を指すが、ここでは Hartmann von Aue, Wolfram von Eschenbach, Gottfried von Straßburg, Walther von der Vogelweide など上部ドイツ語地方を中心に活躍した宮廷詩人たちの用いた文学的共通語の色彩を帯びた、いわゆる「宮廷詩人語」を指す<sup>15)</sup>。

## II

1. Veldeke の Eneit には、彼の故郷の低地フランケン語 (Niederfränkisch) のリンブルク方言および中世低地ドイツ語 (= 中低ドイツ語: Mittelniederdeutsch) の特徴を強く持った押韻が見られる。

1) ゲルマン語の p, t, k は、高地ドイツ語では第二次子音推移を受けて、破擦音の pf, (t)z, kch もしくは無声摩擦音の ff (f), ʒʒ (z), hh (h) に変わったが、低地ドイツ語はこの第二次子音推移の影響を受けなかった。この変化は低地ドイツ語と高地ドイツ語を区別する決定的な音韻推移であるが、Eneit には、この低地ドイツ語の音韻を使用したと認められる押韻の用例がいくつか見られる。

p (= mhd. pf): p (= mhd. p) の押韻:

299, 39-40 kamp: lamp [mhd. kampf ~ mhd. lamp] (Schieb<sup>16)</sup> kamp: lamp).

t (= mhd. tz): t (= mhd. ʒ, もしくは mhd. t) の押韻:

25, 5-6 gehat: schat [mhd. gehaʒ ~ mhd. schatz] (Schieb gehat: scat); 26, 21-22 korten: porten [mhd. kürzen ~ mhd. porten] (Schieb kurten: porten); 174, 11-12 schat: dat [mhd. schatz ~ mhd. daʒ] (Schieb scat: dat); 225, 7-8 vatte: satte [mhd. vaʒʒe ~ mhd. saʒte (<setzen)] (Schieb vate: satte); 242, 37-38 schat: hat [mhd. schatz ~ mhd. haʒ] (Schieb scat: hat); 346, 17-18 schat: goltvat [mhd. schatz ~ mhd. -vaʒ] (Schieb scat: -vat).—この押韻形は Veldeke のリンブルク方言と隣接する中部ドイツ語の中部フランケン方言 (Mittelfränkisch) にも見ることができる

k (= mhd. ch): k (= mhd. k) の押韻:

191, 23-24 Lîke: hêrlîke [mhd. Lîke ~ mhd. hêrlîche] (Schieb Like: herlike).—この用例以外は高地ドイツ語および低地ドイツ語で韻の乱れを生じない k (mhd. ch): k (mhd. ch) の押韻形が用いられている。224, 5-6 hêrlîch: esterîch (Schieb herlic: estric); 35, 29-30 rîche: minnechlîche (Schieb rike: minnelike); 350, 37-38 kunichrîche: lobelîche (Schieb konincrike: <herlike>) u. a. m.—

2) 中高ドイツ語の g (語末で k) は、中低ドイツ語および中部フランケン方言で、n

などの後でk, その他の語末ではchとなるが, Eneitでもこのch音を用いた中低ドイツ語的押韻が見られる。

ch (= *mhd.* k < g): ch (= *mhd.* ch) の押韻:

23, 3-4 tach: gesach [*mhd.* tac ~ *mhd.* gesach] (*Schieb* dach: gesach); 50, 5-6 phlach: sach [*mhd.* phlac ~ *mhd.* sach] (*Schieb* plach: sach); 108, 3-4 ouch: louch [*mhd.* ouch ~ *mhd.* louc (<liegen)] (*Schieb* ouch: louch); 169, 25 ~ 26 gelîch: zwîch [*mhd.* gelîch ~ *mhd.* zwîc] (*Schieb* gelich: twich); 328, 29-30 lach: brach [*mhd.* lac (<liegen) ~ *mhd.* brach (<brechen)] (*Schieb* lach: brach).—この押韻形に対して Eneit では, ch (= *mhd.* k < g): ch (= *mhd.* k < g) の高地ドイツ語形でも韻を乱さない押韻形も数多く見られる。57, 15-16 mach: tach [*mhd.* mac (<mugen) ~ *mhd.* tac] (*Schieb* mach: dach); 227, 5-6 slûch: genûch [*mhd.* sluoc (<slahen) ~ *mhd.* genuoc] (*Schieb* sluch: genuch). このような高地ドイツ語, 低地ドイツ語いずれの音で読んでも韻を乱さない押韻の用例数は148例で, 先にあげた中低ドイツ語的押韻形の92例よりも多くなっている—

3) 動詞 *sîn* (*nhd.* sein) の直説法現在 3 人称単数形は, 中高ドイツ語では *ist* であるが, 中低ドイツ語および中部フランケン方言では *is* である。またこの方言では, 動詞の直説法現在 2 人称単数および直説法過去 2 人称単数の語尾が -(e)st の他に, しばしば省略形の -(e)s をとり, この形がそれぞれの接続法にも用いられている。Eneit においてもこの *is*, -(e)s の形を押韻語に用いた用例が見られる。

*is* (= *mhd.* *ist*): *is* (= *mhd.* *is*) もしくは *es* (= *mhd.* *es*) の押韻:

26, 39-40 *is*: *gewis* [*mhd.* *ist* ~ *mhd.* *gewis*] (*Schieb is*: *gewis*); 95, 17-18 *Anchîses*: *is* [*mhd.* *Anchîses* ~ *mhd.* *ist*] (*Schieb Anchises*: *is*); 257, 31-32 *is*: *des* [*mhd.* *ist* ~ *mhd.* *des*] (*Schieb is*: *dis*) u. a. m.

*sîs* (= *mhd.* *sîst* <*sîn* の接続法現在 2 人称単数形>): *-îs* (= *mhd.* *-îs*) の押韻:

86, 39-40 *sîs*: *rîs* [*mhd.* *sîst* ~ *mhd.* *rîs*] (*Schieb sis*: *ris*); 261, 5-6 *sîs*: *wîs* [*mhd.* *sîst* ~ *mhd.* *wîs*] (*Schieb sis*: *wis*); 265, 23-24 *sîs*: *gewis* [*mhd.* *sîst* ~ *mhd.* *gewis*] (*Schieb* <*bis* < *bist*>): *gewis*).

*-es* (= *mhd.* *-est*): *-es* (= *mhd.* *-es*) の押韻:

317, 35-36 *kunnes*: *gewunnes* [*mhd.* *künnes*<sup>17)</sup> (単数 2 格形) ~ *mhd.* *gewünnest* (*gewinnen* の接続法過去 2 人称単数形)] (*Schieb kunnes*: *gewunnes*).

4) *gân* (*nhd.* gehen), *stân* (*nhd.* stehen) はこの他に *gên*, *stên* の別形をもつ動詞であるが, 中低ドイツ語と中部フランケン方言では, 2 人称, 3 人称単数で *geist/geit*, *steist/steit* の語形をとる以外は *gân*, *stân* 形の語形変化をとる。Eneit もこの中低ドイツ語・中部フランケン方言における語形を押韻に用いている。

19, 39-40 *gân*: *getân* (*Schieb gan*: *gedan*); 24, 25-26 *stân*: *wolgetân* (*Schieb stan*: *wale gedan*); 90, 9-10 *stêt*: *gêt*<sup>18)</sup> (*Schieb steit*: *geit*); 233, 5-6 *gât*: *slât* (<*slân*) (*Schieb geit*: *sleit*); 241, 11-12 *slât* (*slân* の直説法現在 2 人称複数形): *gegât* (*gegân* の直説法現在 2 人称複数形) (*Schieb slat*: *ane gat*) u. a. m.

5) 中低ドイツ語と中部フランケン方言では *mhd.* *ouw*: *mhd.* *iuw* の組合せによる押

韻が見られるが、Eneit でもこの押韻形が用いられている。

ouw (= *mhd.* iuw): ouw (= *mhd.* ouw) の押韻:

28, 35-36 *frouwen: trouwen* [*mhd.* *vrouwen* ~ *mhd.* *triuwen* (女性弱変化 *triuwe* の複数 2 格形)] (*Schieb* *vrouwen: trouwen*); 80, 17-18 *getrouwen: rouwen* [*mhd.* *getrûwen, -trouwen* ~ *mhd.* *riuwen*] (*Schieb* *getrouwen: rouwen*); 251, 5-6 *frouwen: rouwen* [*mhd.* *vrouwen* ~ *mhd.* *riuwen*] (*Schieb* *vrouwen: rouwen*); 310, 27-28 *bouwen: trouwen* [*mhd.* *bûwen, bouwen* ~ *mhd.* *triuwen* (*triuwe* の複数 3 格形)] (*Schieb* *bouwen: trouwen*) u. a. m.

6) 中低ドイツ語の一部と中部フランケン方言の特徴的音韻として、ft の ht への変化があげられる。Eneit でも中高ドイツ語の ft に対応する ht 音が押韻に使用されている。

ht (= *mhd.* ft): ht (= *mhd.* ht) の押韻:

86, 37-38 *maht: ernistaht* [*mhd.* *maht* ~ *mhd.* *ernesthaft*] (*Schieb* *macht: ernestacht*); 90, 3-4 *forhte: dorhte* [*mhd.* *vorhte* ~ *mhd.* *dorfte*] (*Schieb* *vorchte: dorchte*); 91, 23-24 *unendehaht: naht* [*mhd.* *unendehaft* ~ *mhd.* *naht*] (*Schieb* *unendehacht: nacht*); 109, 7-8 *berihnten: stihten* [*mhd.* *berihnten* ~ *mhd.* *stiften*] (*Schieb* *berichten: stichten*); 178, 23-24 *bedaht: unzalaht* [*mhd.* *bedâht* ~ *mhd.* *unzalhaft*] (*Schieb* *bedacht: untalehacht*); 248, 23-24 *kraht: naht* [*mhd.* *kraft* ~ *mhd.* *naht*] (*Schieb* *cracht: nacht*); 254, 13-14 *scrihte: getihte* [*mhd.* *schrifte* ~ *mhd.* *getihte*] (*Schieb* *geschrichte: gedichte*) u. a. m.

7) 中高ドイツ語の b は、中低ドイツ語および中部フランケン方言で v, 語末では f となる。Eneit でもこの v, f 音による押韻が見られる。

v (= *mhd.* b): v (= *mhd.* v) の押韻:

115, 1-2 *neve: geve* [*mhd.* *neve* ~ *mhd.* *gebe*] (*Schieb* *neve: geve*); 195, 23-24 *wolven: kolven* [*mhd.* *wolven* (*wolf* の複数 3 格形) ~ *mhd.* *kolben*] (*Schieb* *wolven: kolven*); 288, 7-8 *leve: neve* [*mhd.* *lebe* ~ *mhd.* *neve*] (*Schieb* *leve: neve*) u. a. m.

f (= *mhd.* p < b): f (= *mhd.* f) の押韻:

126, 7-8 *brief: lief* [*mhd.* *brief* ~ *mhd.* *liep*] (*Schieb* *brif: lif*); 264, 15-16 *warf: bedarf* [*mhd.* *warp* ~ *mhd.* *bedarf*] (*Schieb* *warf: bedarf*); 315, 37-38 *starf: endarf* [*mhd.* *starp* (<sterben) ~ *mhd.* *endarf*] (*Schieb* *starf: darf*) u. a. m.

8) 語中の h 音が消失する現象は、中低ドイツ語および中部フランケン方言のうちリンブルク方言地方と直接境を接するリプアーリ方言に見られる。Eneit もこの語形を押韻に用いている。

55, 15-16 *helen: bevelen* [*mhd.* *heln* ~ *mhd.* *bevelhen*] (*Schieb* *helen: bevelen*); 117, 9-10 *frîen: zîen* [*mhd.* *vrîen* ~ *mhd.* *zîhen*] (*Schieb* *verlien: tien*); 140, 9-10 *niet: ziet* [*mhd.* *niet* (=niht) ~ *mhd.* *ziuht* (<ziehen)] (*Schieb* *nit: tit*); 206, 13-14 *erzien: knien* [*mhd.* *erziehen* ~ *mhd.* *knien*] (*Schieb* *ertin: knin*) u. a. m.

9) この他、Eneit で中低ドイツ語的語形を押韻語に利用したものとして次の例をあげることができる。

224, 1-2 *synagôge: hôge* (= *mhd.* *höhe*) (*Schieb* *synagogen: hoge*).— *mhd.* *hô, hôch*,

höhe (*mhd.* hoch) はこの用例以外は, *hōch*, *hō* で押韻を踏んでいる。23, 9-10 *hō: vrō* (*Schieb ho: vro*); 179, 9-10 *hōch: zōch* (*Schieb ho: to*) u. a. m.—

2. Veldeke の Eneit には, 彼のリンブルク方言の言語的特徴であるとともに, 中部ドイツ語の方言的特徴でもある語形を使用した押韻が見られる。

1) 中高ドイツ語の *iu*, *uo*, *üe* は, 中部ドイツ語圏の広い範囲で *û* 音であられる。Eneit でもこの *û* 音を用いた押韻形を見ることができる。

*û* (= *mhd.* *iu*): *û* (= *mhd.* *û*) の押韻:

25, 19-20 *hât: lât* [*mhd.* *hât* ~ *mhd.* *liut*] (*Schieb hude: lude*)<sup>19)</sup>.

*û* (= *mhd.* *uo*): *û* (= *mhd.* *û*) の押韻:

90, 31-32 *fûr: sûr* [*mhd.* *vuor* (<*varn*) ~ *mhd.* *sûr*] (*Schieb vur: sur*); 266, 39-40 *mûren: fûren* [*mhd.* *mûren* (女性弱変化 *mûre* の複数 4 格形) ~ *mhd.* *vuoren* (<*varn*)] (*Schieb muren: vuren*).

*û* (= *mhd.* *uo*): *u* (= *mhd.* *u*) の押韻<sup>20)</sup>:

82, 35-36 *sun: tûn* [*mhd.* *sun* ~ *mhd.* *tuon*] (*Schieb son: don*)<sup>21)</sup>.

*û* (= *mhd.* *üe*): *û* (= *mhd.* *iu*) の押韻:

93, 11-12 *stûret: fûret* [*mhd.* *stiuret* ~ *mhd.* *vüeret*] (*Schieb sturet: vuret*); 94, 37-38 *fûre: tûre* [*mhd.* *vüere* ~ *mhd.* *tiure*] (*Schieb vure: dure*).

*û* (= *mhd.* *üe*): *û* (= *mhd.* *uo*) の押韻:

228, 25-26 *behûten: gûten* [*mhd.* *behüeten* ~ *mhd.* *guoten*] (*Schieb huden: güde*); 235, 37-38 *kûne: tûne* [*mhd.* *küene* ~ *mhd.* *tuone*] (*Schieb kune: dune*) u. a. m.

2) ウムラウト (Umlaut) の表記がしばしば欠けるのも中部ドイツ語の方言的特徴である。Eneit ではウムラウト表記の欠けた母音を押韻に用いた例を数多く見ることができる<sup>22)</sup>。

*â* (= *mhd.* *æ*): *â* (= *mhd.* *â*) の押韻:

29, 5-6 *wâne: âne* [*mhd.* *wæne* ~ *mhd.* *âne*] (*Schieb wane: ane*); 38, 37-38 *hâle: strâle* [*mhd.* *hæle* ~ *mhd.* *strâle*] (*Schieb hale: strale*); 138, 1-2 *jâre: wâre* [*mhd.* *jâre* ~ *mhd.* *wære* (*sîn* の接続法過去)] (*Schieb jare: ware*) u. a. m.

*ô* (= *mhd.* *œ*): *ô* (= *mhd.* *ô*) の押韻:

113, 31-32 *crône: schône* [*mhd.* *krône* ~ *mhd.* *schoene*] (*Schieb scone: crone*); 226, 7-8 *schône: bestêône* [*mhd.* *schoene* ~ *mhd.* *bestêone*] (*Schieb scone: besteone*) u. a. m.

*u* (= *mhd.* *û*): *u* (= *mhd.* *u*) の押韻:

301, 21-22 *sunde: kunde* [*mhd.* *sünde* ~ *mhd.* *kunde*] (*Schieb sunde: kunde*); 354, 14-15 *wunne: kunne* [*mhd.* *wunne* ~ *mhd.* *künne*] (*Schieb wunne: kunne*) u. a. m.

3) 中部ドイツ語にはまだ *sehen* の複数過去形に対する文法的交替 (Grammatischer Wechsel) が見られる。すなわち *sehen* の過去形は, 単数 *sach* に対して複数で *sâgen* (*mhd.* *sâhen*) となる。Eneit ではこの語形が押韻語を形成している。

28, 13-14 *gesâgen: frâgen* [*mhd.* *gesâhen* ~ *mhd.* *vrâgen*] (*Schieb besagen: vragen*);

53, 19-20 lägen: sägen (*mhd.* lägen (<ligen) ~ *mhd.* sähen) (*Schieb* lagen: sagen); 118, 19-20 mägen: gesägen (*mhd.* mägen (男性弱変化mägeの複数4格形) ~ *mhd.* gesähen) (*Schieb* magen: gesagen) u. a. m.

4) 中高ドイツ語の sol (<suln) は中部ドイツ語では sal となる。Eneit でもこの sal が押韻に用いられている。

81, 11-12 al: sal (*mhd.* al ~ *mhd.* sol) (*Schieb* al: sal); 96, 31-32 salt: balt (*mhd.* solt (suln の現在2人称単数形) ~ *mhd.* balt) (*Schieb* salt: balt); 261, 9-10 salt: gewalt (*mhd.* solt ~ *mhd.* gewalt) (*Schieb* salt: gewalt) u. a. m.

5) 中高ドイツ語の ehe は中部ドイツ語の一部の方言では ie の形であられるが、Eneit でも ie 音が押韻に用いられている。

73, 1-2 niet: siet (*mhd.* niet (=niht) ~ *mhd.* sehet (sehen の直説法現在2人称複数形) (*Schieb* nit: sit)<sup>23)</sup>。

6) 中高ドイツ語の hs は中部ドイツ語の一部の方言で s となるが、この中部ドイツ語形も Eneit の押韻に見られる。

84, 37-38 was: antvas (*mhd.* was ~ *mhd.* antvahs) (*Schieb* was: antfas); 146, 9-10 was: vas (*mhd.* was ~ *mhd.* vahs) (*Schieb* was: vas); 160, 21-22 was: Eckesas (*mhd.* was ~ *mhd.* -sahs) (*Schieb* was: Eckesas).

7) この他にも Eneit では、muoter の中部ドイツ語形 müder が brüder (*mhd.* bruoder) と押韻を踏む用例が見られる。

18, 17-18 müder: brüder (*mhd.* muoter ~ *mhd.* bruoder) (*Schieb* muder: bruder)<sup>24)</sup>。

3. Eneit の押韻語には、Veldeke の故郷のリンブルク方言とは異なる中部ドイツ語の語形が見られる。

1) 中高ドイツ語の u 音は、中部ドイツ語では、その後には l, r, ch など一定の子音がくると o 音となる。リンブルク方言とは異なるこの語形が、Eneit の押韻に用いられている。

o (= *mhd.* u): o (= *mhd.* o) の押韻:

-l の前で-

17, 5-6 wolde: scholde (*mhd.* wolde ~ *mhd.* schulde) (*Schieb* wolde: scolde); 69, 23-24 scholt: holt (*mhd.* schult ~ *mhd.* holt) (*Schieb* scolt: holt) u. a. m. — *Schieb - Frings* 編纂の「Eneide」では中高ドイツ語の schult は, scolt, scult の二つの形であられる。scolt は wolde (*mhd.* wolde), holt (*mhd.* holt) など o 音と韻を踏む場合に用いられ, scult は hulde (*mhd.* hulde), gedult (*mhd.* gedult) など u 音と韻を踏む場合に用いられる。これに対して Etmüller では, 後者の場合も o: o の押韻となる。68, 11-12 scholde: holde (*mhd.* schulde ~ *mhd.* hulde) (*Schieb* sculde: hulde); 124, 27-28 gedolt: scholt (*mhd.* gedult ~ *mhd.* schult) (*Schieb* gedult: scult) u. a. m. — 63, 25-26 wolde: holde (*mhd.* wolde ~ *mhd.* hulde) (*Schieb* wolde: hulde); 88, 1-2 holden: solden (*mhd.* hulden ~ *mhd.* solden) (*Schieb* hulden: wolden) u. a. m. — *Schieb - Frings* では中高ドイツ語の hulde はリンブルク方言の hulde の形であられる。したがって上記の押韻では o: u と韻の乱れを生むことになる —

-r の前で-

60, 7-8 gorde: borde [*mhd.* gurte (<gurten) ~ *mhd.* borte] (*Schieb* gurde: borde);  
85, 3-4 verworren: torren [*mhd.* verworren ~ *mhd.* turren] (*Schieb* verworren:  
durren); 307, 7-8 vorsten: getorsten [*mhd.* vürsten<sup>25)</sup> ~ *mhd.* getorsten] (*Schieb*  
vursten: dorsten) u. a. m.—ここでもリンブルク方言はu音を保持しており, 上記の押  
韻例ではo: uと韻の乱れを生んでいる—

-h の前で-

118, 29-30 dohte: mohte [*mhd.* dūhte (<dunken) ~ *mhd.* mohte (<mugen)] (*Schieb*  
mochte: dochte); 312, 39-40 mohte: flohte [*mhd.* mohte ~ *mhd.* vluhte] (*Schieb*  
mochten: vlochte) u. a. m.

2) Eneitの押韻語には, 中部ドイツ語の中でも, 特にテューリンゲンを中心とした東  
中部ドイツ語の方言的特徴がいくつか見られる。

a) 中高ドイツ語のi音は主として東中部ドイツ語で, しばしばe音としてあらわれるが,  
Eneitには, この音韻が押韻語として使用されたと考えられる用例が多く見られる。しかし  
この場合, Schieb - FringsおよびEttmüllerでは, いくつかの例外を除き, 多くの用例で  
i: eと韻の乱れた形で表記されている。

e (= *mhd.* i): e (= *mhd.* e) と表記された押韻:

24, 15-16 erre: verre [*mhd.* irre ~ *mhd.* verre] (*Schieb* irre: verre); 29, 1-2 frede:  
rede [*mhd.* vride ~ *mhd.* rede] (*Schieb* vrede: rede); 36, 25-26 brengen: lengen  
[*mhd.* bringen ~ *mhd.* lengen] (*Schieb* brengen: lengen)<sup>26)</sup>; 52, 5-6 geerret: merret  
[*mhd.* geirret (<irren) ~ *mhd.* merret] (*Schieb* geirret: merret); 182, 23-24 venden:  
senden [*mhd.* vinden ~ *mhd.* senden] (*Schieb* vinden: senden); 193, 37-38 enweder:  
neder [*mhd.* enweder ~ *mhd.* nider] (*Schieb* neweder: neder); 205, 23-24 ieweder:  
neder [*mhd.* ieweder ~ *mhd.* nider] (*Schieb* ieweder: neder)<sup>27)</sup>; 236, 9-10 velt:  
schelt [*mhd.* velt ~ *mhd.* schilt] (*Schieb* velt: schilt) u. a. m.

i (= *mhd.* i): e (= *mhd.* e) と表記された押韻:

68, 31-32 gesende: vinde (*Schieb* sende: vinde); 72, 23-24 missewenden: vinden  
(*Schieb* missewenden: vinden); 94, 35-36 hinnen: erkennen (*Schieb* hinnen: erken-  
nen); 99, 13-14 kinde: ende (*Schieb* kinde: ende); 172, 21-22 trinken: erdenken  
(*Schieb* drinken: erdenken); 178, 1-2 dinge: enge (*Schieb* dinge: enge); 227, 7-8  
winde: ende (*Schieb* winde: ende); 281, 13-14 dinge: lengen (*Schieb* dinge: len-  
gen) u. a. m.

b) 東中部ドイツ語のうち特にテューリンゲン方言で, 中高ドイツ語の-en音はしばし  
ば-e音であらわれる。Eneitにおいても, 中高ドイツ語の表記法による-en音を-e音に置き  
換えることによって押韻の乱れを解消できる例が多く見られる。この場合もテキストでは中  
高ドイツ語の表記法に従って-enと表記されている。

28, 29-30 kemenāten (kemenāteの複数3格形): rāte (*Schieb* kemenaden: rade); 65,  
11-12 willen (男性弱変化willeの単数4格形): stille (*Schieb* wille: stille); 99, 5-6  
schībe: belīben (不定詞) (*Schieb* schive: bliven); 112, 1-2 zellen (不定詞): bīspelle

(*Schieb* tellen: bispelle); 134, 39-40 graben (男性弱変化 *grabe* の単数 4 格形): *abe* (*Schieb* grave: *ave*); 173, 23-24 gewinnen (不定詞): *inne* (*Schieb* gewinnen: *inne*); 179, 1-2 herbergen (女性弱変化 *herberge* の単数 3 格形): *halsberge* (女性強変化 *halsberge* の複数 4 格形) (*Schieb* herbergen: *halsberge*); 192, 19-20 branden (brennen の直説法過去 3 人称複数形): *wigande* (男性強変化 *wigant* の複数 1 格形) (*Schieb* branden: *wigande*); 204, 7-8 wilden (形容詞複数 3 格形): *gevilde* (中性強変化 *gevilde* の単数 3 格形) (*Schieb* wilden: *gevilde*); 205, 31-32 kleinen (形容詞複数 3 格形): *eine* (副詞) (*Schieb* cleinen: *eine*); 243, 13-14 frome: *komen* (不定詞) (*Schieb* vromen: *komen*); 307, 17-18 gote (男性強変化 *got* の複数 4 格形): *boten* (男性弱変化 *bote* の単数 4 格形) (*Schieb* gode: *bode*); 350, 27-28 anen (男性弱変化 *ane* の単数 3 格形): *ane* (*Schieb* anen: *ane*) u. a. m.

### III

以上 Veldeke の Eneit における押韻使用のうち、主として方言的色彩の強い押韻形について検討を加えた。これらの押韻はいずれも、上部ドイツ語を中心としたいわゆる標準的中高ドイツ語に置き換えると不純な韻を生むリンブルク方言的な中低ドイツ語、もしくは中部ドイツ語の特徴を有している。しかし、Veldeke による方言的押韻使用のうちで最も大きな特徴は、中低ドイツ語、およびリンブルク方言圏に隣接する中部フランケン方言の色彩を強く帯びた数多くの押韻形にある。これは詩人が Eneit を詩作する際、自分の故郷およびその周辺の言語を基礎にしたことをうかがわせる。さらにリンブルク方言とも共通する広い範囲の中部ドイツ語地方の方言による多様な押韻形と、特に、リンブルク方言とは異なるテューリングゲンの東中部ドイツ語による押韻形は、Veldeke が滞在し、Eneit を完成されたテューリングゲンの言語の影響をうかがわせ、彼がテューリングゲンを中心とした中部ドイツ語地方の言語に留意したことが推測できる。たしかに Eneit には、中低ドイツ語および中部ドイツ語の音韻を用いても、これを上部ドイツ語を中心とした標準的中高ドイツ語に置き換えても、いずれの場合も韻を崩さない押韻形も数多く見られ、その点では Veldeke が、政治的、文化的中心として広く影響力を持っていた上部ドイツ語的高地ドイツ語を意識した可能性も十分考えられる。この点に関しては従来の研究によって、Veldeke の依拠したライン地方の詩人語もしくは北部ドイツ語の文学語の存在が指摘されている。宮廷を中心に詩作活動をした詩人たちが口語的方言ではなく、文章語を用いたことは十分に考えられ、この文章語も比較的広い範囲に通用する文学的共通性を持っていたと想像できる。この他にも Wolfram, Gottfried などが、Veldeke をドイツにおける叙事詩人の先駆者として称え、彼の詩の優れた芸術性と卓越した言語形式を賞賛していることは<sup>28)</sup>、彼の言語の文学的共通語としての傾向を認める一つの根拠とはなりうる。しかし Veldeke が Eneit の詩作において依拠したとされるライン地方の詩人語、もしくはテューリングゲンの宮廷的文学語なるものがどのような形態を示していたのかは、その存在の有無も含めて依然不明であり、また Veldeke の押韻のいわゆる超地域的特徴、もしくは高地ドイツ語的傾向については、本稿の直接のテーマではない。いずれも今後の考察の課題としたい。本稿における考察の結果として、Eneit のリ

ンブルク方言を中心とした中低および中部ドイツ語の方言的色彩の濃い、多様にして数多い押韻形は、少なくとも Eneit に超地域的な文学的共通語の傾向を認めようとする学説に対しては、その地域性を余りにも強調する点から、消極的材料とならざるをえないといえることができる。

## 註

- 1) Norbert Richard Wolf: Geschichte der deutschen Sprache, Bd. 1: Althochdeutsch-Mittelhochdeutsch, Heidelberg 1981, S. 184.; Heinrich von Veldeke: Eneasroman. Nach dem Text von Ludwig Ettmüller ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Dieter Kartschoke, Stuttgart 1986, S. 857.
- 2) Henric van Veldeken: Eneide, I. Einleitung · Text. Hrsg. v. Gabriele Schieb u. Theodor Frings, Berlin 1964, S. LIV ff.; L. Wolff u. W. Schröder: Heinrich von Veldeke. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. Bd. 3. Berlin/New York 1981, Sp. 907f.
- 3) Dieter Kartschoke: a. a. O., S. 859f.
- 4) Heinrich von Veldeke: Eneide. Mit Einleitung und Anmerkungen hrsg. v. Otto Behagel, (reprografischer Nachdruck der Ausgabe Heilbronn 1882), Hildesheim/New York 1970.
- 5) G. Schieb u. T. Frings: a. a. O., S. XII ff.; L. Wolff u. W. Schröder: a. a. O.
- 6) G. Schieb u. T. Frings: a. a. O.
- 7) Dieter Kartschoke: a. a. O., S. 860.
- 8) Norbert Richard Wolf: a. a. O.; Dieter Kartschoke: a. a. O., S. 857.; Peter von Polenz: Geschichte der deutschen Sprache, 9. Aufl., Berlin/New York 1978, S. 55f.
- 9) Vgl. Eneasroman 352, 19-354,1.
- 10) Peter von Polenz: a. a. O.
- 11) C. J. Wells: Deutsch: eine Sprachgeschichte bis 1945. Aus dem Englischen von Rainild Wells, Tübingen 1990, S. 128.
- 12) Dieter Kartschoke: a. a. O.
- 13) G写本のテキストはそのまま、G. Schieb u. T. Frings のリンブルク方言によるテキストに並置された形で掲載されている。
- 14) 中低ドイツ語および中部ドイツ語の音韻、形態および書記法に関しては、A. Lasch: Mittelniederdeutsche Grammatik. 2., unveränderte Auflage, Tübingen 1974.; Hermann Niebaum: Phonetik und Phonologie, Graphetik und Graphemik des Mittelniederdeutschen. In: Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung. Hrsg. v. Werner Besch, Oskar Reichmann, Stefan Sonderegger, 2. Halbband, Berlin/New York 1985, S. 1220 ff.; John Evert Härd: Morphologie des Mittelniederdeutschen. In: Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung, a. a. O., S. 1227 ff.; R. E. Keller: Die Deutsche Sprache und ihre historische Entwicklung. Bearbeitet und übertragen aus dem Englischen, mit einem Begleitwort sowie einem Glossar versehen von Karl-Heinz Mulagk, Hamburg 1986, S. 250 ff.; Paul/Moser/Schröbler/Grosse: Mittelhochdeutsche Grammatik Tübingen 1982, S. 134 ff.などを参考とした。
- 15) 「宮廷詩人語」に関しては拙稿「シュタウフェン朝時代の宮廷詩人語について」(信州大学人文学部, 人文科学論集第22号1988, 111-119頁参照。

- 16) G. Schieb - T. Frings 編纂のテキストからの引用を指す。
- 17) ü>u の現象に関しては 2.2) を参照。
- 18) stêt: gêt の押韻形はこの他にも多くの用例に見られる。
- 19) この他 350, 19-20 も同様の韻を踏んでいる。
- 20) Eneit では u: û, o: ô, a: â の押韻形が数多く見られる。z. B. 23, 19-20 hörden: borden  
[mhd. hörten < hoeren ~ borden] (Schieb horden: borden); 287, 39-40 mäch: gesach (mhd.  
mâc ~ mhd. gesach) (Schieb mach: gesach).
- 21) sun: tûn の押韻形はこの他にも18例において見られる。
- 22) 2.1) の iu, ûe > u の音韻変化もここに含むことができる。
- 23) この押韻形は sehen の直説法現在 2 人称複数形と niet の押韻にのみ見られる。
- 24) この押韻形はこの他 4 例見られる。
- 25) ü>u の音韻変化については 2.2) を参照。
- 26) mhd. bringen を押韻語とする用例はこの他 21 例見られるが、いずれも i: i の押韻を踏んでい  
る。z. B. 45, 23-24. dingen: bringen (Schieb dingen: brengen).
- 27) この他 mhd. nider は多くの用例で mhd. wider と組み i: i の押韻形であらわれている。46, 11  
-12 nider: wider (Schieb nedere: wedere) u. a. m.
- 28) Vgl. Parzival 292, 18 ff., 404, 28 ff.; Willehalm 76, 22 ff.; Tristan 4723-4750.